

望 星

ぼうせい

12

2018

<http://www.tokaiedu.co.jp/bosei/>

考える人の実感マガジン

特集

レコードに針を落とすとき

- ◎レコードよ、歌謡曲よ、東京よ 鈴木啓之
- ◎個性際立つSP盤時代の音 郡修彦
- ◎レコード文化への貢献は誇り ナガオカ
- ◎酒と本と、レコードと 隅田靖
- 中古レコード屋さん探訪
- アナログ・レコード再生産(ソニー・ミュージックエンタテインメント)
- フツーの人たちの音楽の聴き方

対談 につぼん そぞろ歩き⑫
「鉄道、職人、そしてレコード」
池内 紀・川本三郎

連載
愛国詐欺 三山 喬

ルポ
部族国家アメリカ 福田伸生



「レコード針のナガオカ」から「ナガオカ」へ

レコード文化への貢献は誇りです

レコードを聴くには、レコードの溝から音を取り出すレコード針が必要。

つまり、レコード愛好者は、みなこの会社の針にお世話になっているのである。

今回、ナガオカの長岡香江さん(代表取締役)とナガオカトレーディングの西武司

(執行役員・営業部長)に聞いた。

レコード文化を支え続けて

——一九八〇年代前半からCDが本格的に普及し、レコード針の需要が激減しました。それでも製造を続けてこられたのは、会社の理念あつてのことでしょうか？

長岡 理念としてレコード針を製造し続けることは、直接謳ってはいま

せん。しかし、私で四代目になるの

ですが、創業者の長岡榮太郎をはじめ、二代目、三代目はアナログレコ

ードに愛着があり、特に二代目は、「たとえ赤字でも、レコード文化を守るといふ意義からレコード針は作り続ける」と、レコード針に対する強い思い入れがあつたようです。

大手が次々と撤退していくなか、事業を多角化し、利益が出た部分で

レコード針製造をサポートし、いわば社会貢献的に作り続けてきたという経緯があります。

——そのおかげで、いまもレコードを聴くことができるわけですね。

長岡 ナガオカが製造しているのは、ダイヤモンド接合針といって、人工ダイヤモンドとチタンを接合し、研磨した針ですが、ダイヤモンド接合針では、世界の九割以上のシェアを

株式会社ナガオカ

●オーディオ関連部品のほか、高硬度難削材の結合、研磨などの特殊加工が専門分野。高度な技術は世界的に高い評価を受けている。製造分野はレコード針、宝石、超硬合金、マグネット、プローブピンなど多岐にわたる。

誇っています。長さ一ミリほどの小さなものですが、それが世界中に届けられている。ナガオカが生産をストップしてしまえば、レコードを聴けなくなってしまうわけで、社員もレコード文化を支えているというプライドは持っていますね。社長に就任して以降、多方面からレコードに対する思いを聞く機会が多くなりました。なかでもヨーロッパやアメリカから、生産をやめないで欲しいという声をよくいただきます。

日本でも一五年にテクニクス（バナンニクス）がターンテーブルを再発売し、レコードに関するイベントが開催されるなど、三年ほど前からアナログレコードが再び注目されています。レコードを触ったことがない若者が大勢いますから、レコードをより身近に感じていただきたいという思いから、テクニクス、東洋化成

針も進化していますから、音がいい。ファッション性も含め、魅力が感じられるでしょう。

黒字清算という英断

——二代目の赤字覚悟でもレコード文化を絶やさないと英断は結果的には大正解でしたね。

長岡 ナガオカは一度黒字清算をしています（一九九〇年）。その当時、従業員は約千人、売り上げは百億以上、香港やインドネシアに海外オフィスがあり、全国に営業所がありました。CDが登場しても、すぐにレコードの針が売れなくなっただけではありません。しかしCDが台頭し、少しずつ売り上げが落ち、このままでは将来が危うくなる可能性があるかと判断したのです。東京・大塚にあった本社と工場を整理し、千人いた

（レコード盤製造、ナガオカの三社でレコード再発見プロジェクトを立ち上げました。私も、レコード文化について大学などに講演へ行き、プレイヤーを持って行って聴いてもらうといった活動もしています。

西 「レコードは文化財」ということから、十一月三日の文化の日は「レコードの日」でもあるんです。東洋化成のお声がけで、十一月三日にイベントを開催しています。今年で四回目で、渋谷の「MAGNET by SHIBUYA 109」に、アーティストやレコードショップの人たちが集まります。多くの人にレコードに触れて、聴いてもらうイベントです。

——二、三十代の人たちはレコードという存在は知っていても、実際に聴いたことはないと言いますね。

西 レコードをかけてみてください

と言うと、普通なら黒い盤の外側から針を落とすのですが、中央の紙のレーベルのところに針を落とそうとする方もいます（笑）。

そういう若い人にとっては、レコードは新しいメディアに見えるようですね。古いものが新しい、オシャレだという感覚と視点で注目しているのだと思います。また、三〇センチのレコードジャケットがアートとしてかっこいいと部屋に飾ったりしているようです。CDはコンパクトという利点がありますが、レコードは、その逆でインパクトがあります。音の部分でも、CDの場合はビット数の中に収めなければならぬので、上と下の音を切って入れています。レコードの場合は、そのまま空気音というか、そこにある音が、全部溝の中に刻まれています。なおかつ、レコードを聴くプレイヤーや

従業員を十分の一にしました。黒字経営だったため、全員に退職金が支払われ、再就職もあつせんしたという、企業の整理としては稀有なケースです。

——なかなかできないことですね。

長岡 利益が出ているのに整理するというのは、経営者としてとても難しい判断だと思っています。ビジネススクールの先生からとても珍しいケースであると言われました。

西 私は、当時の社長が、全社員に向かつて解散の発表をしたとき、入社してそれほど経っていなかったのに、退職金などもらえらると思っていなかったのです。しかし相当額の退職金を明示され、再就職先のリストが載った冊子まで配られたんですよ。困っていたら相談にのるよとまで言ってもらいました。

会社としてはたいへんな危機感が

あつたのかもしれませんが、当時の従業員への行き届いた配慮がありました。いまでもすごいことだったなと思いますね。そうした経緯があつたから、「またナガオカで働いてほしい」と声をかけてもらったときは、「喜んでやらせてもらいます」という気持ちでした。

世界には、数十億というレコード盤があります。私自身、それが聴けなくなるというのはどうなのか？という思いがあります。解散当時は、レコード愛好者の皆さんから「針を作るのをやめないでほしい」という手紙が山のように届いたんです。

製造ノウハウを絶やさなかった

長岡 ナガオカは清算後も初代社長ゆかりの地である山形の工場でレコード針を製造し続けました。一旦製

造をやめてしまうと技術の継承ができず、レコード針の製造を断念してしまう可能性もあったかと思えます。

西 CDが全盛となっても、ヨーロッパやアメリカなど海外からの注文はいただいております。とくにヨーロッパはいいものはずっと大切にすると文化がありますね。

長岡 「ナガオカはもうだめだ」と世間の皆さんから思われていた時期にも、世界中にレコード針を出荷し続けていたようです。ただ事業の九割をレコード針が占めていたがゆえの危機でしたから、その後三十年は事業の多角化を推進してまいりました。「レコード針のナガオカ」から「ナガオカ」へ時代の流れに合わせ変化し続けていくこと、これが会社の課題だと思っています。

ただ、「レコード針のナガオカ」と言ってくださるのはコーポレートCDは床などに直接置いて大丈夫ですが、レコードは傷がついてしまうなど、取り扱いや保管に多少注意が必要です。レコード盤の表裏を確認し、針を確認してからかける手間は必要ですが、よりよいオーディオシステムでレコードをかけると、レコードならではの温かみのある音を楽しむことができます。

初めてのメディアとして触れている若者にとってはわからないのは当然で、だからこそ入門的な本も売れているのでは。私たちがところにも、初歩的なことを教えてほしいという依頼があります。

きっかけがどうであれ、より多くの人にレコードで音楽を聴いていただけるということは嬉しいことだと思います。そこから、いいコンポー

アイデンティティとして、また唯一無二の存在として、ナガオカの誇りだと考えますし、その誇りは社員共通のものだと思っております。

——山形はものづくりで優秀な企業が多いという見方があります。山形でもものづくりを続けることのメリットは？

長岡 弊社の山形工場は、山形新幹線のさくらんぼ東根駅から車で五分、おいしい山形空港からも車で五分の場所にあります。

ナガオカの工場は七、八割が女性です。顕微鏡を覗く非常に細かい作業が続きますから、女性には向いた仕事です。山形県は女性の就業率が高い県で、東北の皆さんの気質なのでしょうか、本当に粘り強く作業に没頭しています。

こうしたことをトータルで見ると、結果として、山形工場でレコード針

ネットシステムを組むと音が変わって、また違う刺激があることを伝えていきたいですね。イベントでレコードとCDの音の違いの聴き比べをすると、レコードの音に感動してくださる方もいらっしゃいます。

——社の若手たちは、「レコード針のナガオカ」というイメージを持っていますか？

長岡 さまざまな職種の人がいまいるので、レコードに対する思いもいろいろかと思えます。「ナガオカに勤めています」と言ったときの、五十代以上の方の反応を見て、「え？うちって、もしかしたら有名なの？」とびっくりしたという社員もいます（笑）。もちろん、DJをやっているものとレコードが好きだったり、お父様がオーディオでレコードを聴いていたのでナガオカを知っていた社員もいます。音楽が好きでナガオ

の製造を続けることができたことはよかったですね。

若者に再評価されるレコード文化

——「レコードの聴き方」的な本も売れているようです。

西 レコードに初めて興味を持ってくださった方が増えているとしたら嬉しいですね。プレーヤーは、いま一万円前後で手に入るものもあり、レコードを乗せて電源を入れて針を落とせば、すぐに聴けるというような手軽なものも出てきています。

一万円のプレーヤーを初めて購入された方は、針を交換することが必要だということに気づかないかもしれません。サファイヤの針だと、大体十五枚くらい（約十五〜二十時間）聴いたら針の交換を推奨しております。先が汚れてすり減った針で聴い

かに入社する方も、ほかの会社に比べて多いかもしれません。

——今後の展開について教えてください。

長岡 再来年、旧ナガオカ（長岡時計用部製作所）創業から数えて八十年周年になります。創業八十周年に向けて、若者など、より広い年齢層の皆さんにレコードの魅力を発見してもらえような商品を打ち出せたらと、新商品の開発をはじめたところ

です。それから、やはり何と言っても、社のアイデンティティである「レコード針のナガオカ」は守りつつ、一層の多角化を図り、存続し続けていくこと、「ナガオカ」という会社がどのような会社かということ